

# 大学における地域貢献の成果について

## － 10年目を迎える「ミニたまゆり」の活動報告－

ばんしょうかずまさ      かわなまさあき      かのうひでとし      おだいらたかお      はせがわひろあき  
番匠一雅      川名正昭      和秀俊      小平隆雄      長谷川洋昭

### 〈要 旨〉

田園調布学園大学(川崎市麻生区)で開催されている、5歳から15歳の児童を対象とした地域貢献活動、「ミニたまゆり」が10年目を迎えた。本活動は、児童へのキャリア教育および運営を担うボランティア学生の福祉マインドの醸成を目的としており、現在では、多くの地域住民から期待され、行政・企業・地域住民・大学が一体となって取り組む地域に根付いた活動に成長している。本稿では、10年にわたるミニたまゆりの活動について報告を行い、学生や子ども達の教育活動および大学の地域貢献活動の可能性について考え、次の10年の指針となるミニたまゆりの基本方針を提案している。

### 〈キーワード〉

ミニたまゆり、キッズタウン、キャリア教育、ミニシティー、地域貢献

## I. はじめに

近年の社会情勢の変化や18歳人口の減少により大学が担う役割が変化しつつある。これまで大学のミッションは教育と研究を重点に置いた「教育研究機関」であるという認識が一般的であった。しかし近年になり、大学のミッションである教育・研究と並んで、第3のミッションとして「社会貢献」の重要性が強調されるようになってきている。

大学は地域にとって知的・人的資源であり、地域に貢献する人材を育成、供給することにより、地域の発展にとって重要な存在である。また、大学と地域との関係性は大学から地域への一方的なものではなく、地域連携を通じて、地域にとっては大学の知的・人的資源が、大学にとっては教育・研究の一環として地域を有効活用するなど地域にも大学にも両者にメリットがあるWIN-WINの関係が理想的である。さらに教育研究の場としての地域連携活動に学生を参画させていくことで、学生はその活動を通じて社会や地域との関わりの中から多くのことを学ぶことができる。

(番匠・二宮 2011)

また18歳人口の減少により大学も淘汰される時代に突入し大学間競争も激化している。今後より一層、各大学が他の大学にはない特色のある教育を提供し差別化を図る必要がある。そこで本稿では、本学が行っている地域貢献の意義と成果を整理するとともに、本学の地域貢献活動の中でも最大の規模を持ち2005年から10年間にわたり実施されている「子どもが作る町・ミニたまゆり」(以下 ミニたまゆり)の地域貢献・地域連携の成果や学生の教育的効果について整理を行い、次の10年に向けた新たな指針を定義する事を本稿の目的としている。

## Ⅱ. 大学における社会貢献

大学の社会貢献とは、19世紀後半のイギリスにおいて、エリートに占有されていた大学の門戸を開き、高等教育の機会を広く民衆にもたらした大学拡張に起源があるという(小池・天野 2011)。そして、大学拡張がアメリカに伝わり、非エリート層に実践的な教育を提供しコミュニティの産業振興を担う人材を養成するランドグラント・カレッジや、貧困などのコミュニティの問題解決に取り組むアメリカ型の研究大学の設立により飛躍的に拡大した。こうして、大学に集積された知的資源を学外における公共の福祉に資することが、大学の使命としてみなされるようになったのである。現在では、大学の社会貢献を推進するために、大学とコミュニティとが対等で互恵的な関係によるパートナーシップが不可欠であるとしている。この「コミュニティ・パートナーシップ・モデル (community partnership model)」の導入は、コミュニティが求めるものとは根本的に異なり普遍的な知を探究する大学のアプローチに、抜本的な変化を求めることとなった。

日本における大学の社会貢献は、2005年の中央教育審議会の答申において、教育と研究に加えて、大学の第三の使命として打ち出された。そして、2006年に教育基本法が改正され、第7条では、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」として、大学における社会貢献の役割・機能について明文化された。翌2007年には、学校教育法第83条第2項において、「大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」という同様の改正が行われた。このように、大学における社会貢献は、法制度や政策的にも重要な大学の役割・機能として期待されている。

このような中、2012年の中央教育審議会の答申では、「大学が地域再生の拠点となるとともに、地域の未来を担う有為な人材の育成」の重要性が指摘され、2013年度から、文部科学省の地(知)の拠点事業が開始された。この事業では、「学生がしっかり学び、自らの人生と社会の未来を主体的に切り拓く能力を培う大学、地域再生の核となる大学、生涯学習の拠点となる大学、社

会の知的基盤としての役割を果たす大学」と述べられている。このように、大学は学生が主体的に学ぶ環境を整備し、大学や学生が社会の問題解決の担い手として求められているといえよう。

### Ⅲ. 本学の地域貢献活動

調布学園女子短期大学から、2002年に福祉系4年制大学へと改組した本学は、それまで地域貢献に積極的に取り組んでいるとは言えない状況が続いていた。しかし、福祉系教員の増加や、入学する学生の地域貢献に対する要望は、日々増加する状況であった。それらの要望に対応するため、2008年に設立された、地域交流センター準備委員の委員長藤原亮一は、学長にあてた、地域交流センター設立趣意書にて次のような意見を述べている。

地域貢献活動を、全学的な取り組みのもとに実践すべき根拠の一つ目は、本学の教育目標ならびに建学の精神にある。「地域社会への貢献」は、福祉社会に対応できる「人材の育成」とともに、本学の教育目標として高く掲げられている。また、建学の精神である「捨我精進」の川村理助先生による解題中に、とくに「社会に対する精進」が細目として謳われている。本学園、大学に所属する全ての教職員、学生は、この理念・目標を実現すべき社会的責務がある。

二つ目の根拠は、『自己評価報告書』を紐解くまでもなく、現在の本学における地域交流・貢献活動が、自他共に満足すべきものではないとの共通の認識である。個々の教職員の獅子奮迅の働きが、地域からの高い評価を受けていることは事実である。しかし、学外からは未だ不足であり、さらなる努力をという要望の声が聞こえる。対応には個人の努力だけでは困難であり、早急に地域交流の情報・資源配分の窓口一元化を求める声が学内でも高まっている。昨年度の『自己評価報告書』中に、「地域交流センター」設置計画が記されたのには、こうした背景がある。

この、趣意書を経て、2009年より、本学に地域交流センターが設置され、専属の事務職員が、地域のボランティア情報の収集・整理・学生へのボランティアコーディネートなどの業務を行うこととなった。人間福祉学部の必須授業である、「福祉マインド実践講座」では1年生全員が地域のボランティアに参加することが義務付けられており、毎年250名以上のボランティアの管理を行っている。本稿で紹介するミニたまゆりも、学生が行うべきボランティア活動に位置付けられており、担当教員と協力して地域交流センターが学生の管理を担うことで、業務分担ができ、スムーズな運営を行えるようになっている。

**表 1 本学が取り組んでいる地域貢献活動**

しんゆりマルシェ(川崎新都心まちづくり財団主催)への協力実施
川崎・しんゆり芸術祭実行委員(教員)として麻生区および周辺の教育機関や施設, 芸術関連団体との連携により芸術祭を実施
赤い羽根共同募金の実施
区内の子育て支援施設での学生による保育ボランティアの実施
大学を会場とする子どもがつくる町「ミニたまゆり」の開催
区内の中学校への学習支援ボランティア
「けろけろ田園チャイルド」(麻生区こども支援室, 保育所, 大学の連携事業, 地域の親子を対象としたイベント型の子育て支援プログラムを大学にて開催)
「あさお子育てフェスタ」における「アトリエ広場」の開催
「あさお子どもまつり」等区が主催する子育て中の親子を対象としたイベントへの協力
区内の地域子育て支援センターやこども文化センターにおける本学学生による保育ボランティア, アルバイト
社協が運営する子育て支援事業(例.オモチャ図書館)の学生による見学・研修
区内の子育て中の親子を対象とした講座への講師派遣
区内の小学校のわくわくプラザ(学童保育)でのアルバイト
「麻生区子ども関連ネットワーク会議」委員長(教員)
区内小学校における本学BBS会会員学生による下校時の見守り活動, 各種行事支援
ボランティア養成講座
福祉教育(小・中学校で福祉教育の授業)
地域高齢者へのパソコン教室実施
公開講座
川崎新都心街づくり財団 新百合ヶ丘タウンマネジメント計画研究会
麻生警察署生活安全課との連携による本学BBS会会員学生による街頭広報活動, 市内小学校での防犯教室の実施
麻生区保護司会(事務局: 麻生区役所内)との連携による非行・犯罪のない地域づくりを目指す「社会を明るくする運動」の実施。本学BBS会会員学生による協力
区内保育園における授業科目「保育所実習」の実施
区内の地域子育て支援センターにおける授業科目「子育て支援実習」の実施
区内保育所における授業科目「保育インターンシップ」の実施
麻生区在住高齢者の社会交流と健康に関する調査研究
区内の親子を対象とした地域子育て支援事業(2歳児保育室「あそびば『ほこあ』」)の研究室教員・学生による開催
麻生区内での社会福祉施設でのソーシャルワーク実習, 介護福祉実習, 精神保健, 福祉実習, 医療福祉実習, スクールソーシャルワーク実習
区内(市内)民間保育園での実践研究講師(造形班), 保育士対象のワークショップの実施

地域交流センターの設立を機に, 本学の地域貢献活動は活発化しており, 現在では表 1 に示す数の地域貢献活動を定常的に行うようになっている。2013 年の公益財団法人日本高等教育評価機構の 2012 年度自己点検評価書では, 本学の地域交流センターについて下記のように評されている。

「地域交流センター」は 2009 年度に設置され, 現在は, 地域社会において支援を必要とする人々にボランティアを派遣すること, 障がいのある学生への支援を行うこと, の二つの役割を果たしている。「地域交流センター」は設置されてまだ日が浅く, 組織としての整備, 地域との連携, 実施するプログラムの企画, 教員(特に福祉の教員)との連携など課題はあるものの, 地域貢献はこれからの大学に期待される重要な役割であるので, 更なる発展が期待される。

また、2015 年 11 月に開催された、「第 9 回大学人サミット信州・まつもとカレッジ 2015 -大学自慢コンテスト-」において、本学の地域貢献活動が紹介され、参加 9 大学中最も高い評価を受け総合優勝することが出来た。さらに、同年 12 月には、表 1 に示した区内の様々な貢献活動をいっそう促進し、地域の発展と人材の育成に連携して取り組むための、「麻生区との連携・協力に関する協定書」を取り交わすこととなり、本学が長年取り組んできた地域貢献活動が、対外的にも評価され、今後の発展が期待されている状況となっている。

## Ⅳ. 子どもが作る町ミニたまゆり

ミニたまゆりは、本学が行っている地域貢献活動の中でも最大級の活動であり、毎年多くの地域住民が参加し、本活動を円滑に行うために、多くの学生がボランティアとして参加している。以下に、ミニたまゆりの概要を紹介すると共に、学生が執筆・編集を行っている報告書を基に、第 10 回ミニたまゆりの成果について記載する。

### 1. ミニたまゆりの沿革

ミニたまゆりの始まりは当時の本学の教員であった酒井一郎がゼミナールの延長として、2005 年 11 月に学園祭のイベントとして 2 日間開催したのが始まりである。酒井一郎は本学に在籍中の 2005 年 2 月、東京都内で開かれた「子どもの参画情報センター」主催の研修例会に参加をし、そこで 1979 年の国際児童年にドイツのミュンヘン市ではじめて開催された、ミニ・ミュンヘンという「子どもたちが遊びを通じて職業体験をしながらまちづくりをする、子どもたちが主役のバーチャル都市」の活動を知り、ミニ・ミュンヘンの取り組みは「子どもたちが遊びを通して社会とのつながりを体得するホリスティック(包括的)な仕組みに深い感銘を受けた。酒井一郎は 2005 年春、自分が勤務する本学でもやってみようと思い立った。先行する各地の「子どものまち」は市民グループによるものが多く、大学がつくる「子どものまち」は初めてあった。(酒井 2008)

本学は、学則の第 1 条において、「捨我精進の精神と人間尊重を基調とし、時代の要請に対応できる柔軟な思考力と行動力のある人間性豊かな人材を育成し、もって地域社会・国際社会の福祉に貢献することを目的とする。」と規定し、これからの福祉を担う人材育成を教育目的としている。近年、少子化傾向にある我が国の社会の発展のためには活力ある青少年の育成が緊急の課題であり、地域の教育機関である大学には社会貢献活動としてこの課題に積極的に取り組む使命があるという背景も併せて、「子どもの町」の活動を大学で展開する事で参加する子ども達だけではなく、学生への教育効果が期待できると考えるようになった。酒井一郎の退職を機に、ミニたまゆりの活動は他の教員に受け継がれ、2008 年の第 5 回ミニたまゆりより番匠一雅が実行委員長に就任、現在にいたるまで、本活動の企画・運営を担当している。本活動の特徴として、PDCAサイ



クルを意識した活動の振り返りを行っており、参加者から収集したアンケートに書かれている要望を積極的に次回の活動に取り入れることにより、参加児童・参加学生の満足度の向上に努めてきた。過去 10 年の主な活動を表 2 に示す。

表 2 ミニたまゆりの沿革

第 1 回	2005 年 11 月	学園祭と同時開催。 酒井ゼミの学生と数人の教員で運営。 2 日間で 500 人の参加。
第 2 回	2006 年 8 月	4 日間で 2000 人の来場者。 消防署・警察署・川崎市教育委員会等の組織と協力。 余ったユリーの活用方法として、地域通貨たま・市民プールの無料券と交換が可能となる。
第 3 回	2008 年 3 月	3 日間で 3000 人の来場者。 川崎市阿部市長が視察に訪れる。以後毎年ミニたまゆりに参加。 外部団体の参加が増加。カウンタック・フェアーリの展示。
第 4 回	2009 年 2 月	2 日間で 2000 人の来場者。 地域福祉学科 1 年の必修行事となる。 川崎 FM によるラジオ PR を開始。
第 5 回	2010 年 2 月	地域交流センターが設立。同センターの担当行事。 人間福祉学部 1 年の必修ボランティアとなる。 前日に大子ども会議を開催。
第 6 回	2011 年 2 月	市議会が開催され市民の声から町の公約が決まる。 模擬裁判が開催される。 テレビ神奈川で特集番組が放映される。
第 7 回	2012 年 2 月	2 日間で 3000 人の来場者。 黒岩神奈川県知事が視察に訪れる。 プロ声優・アナウンサーの指導による声優・テレビ局の仕事。 大人ユリーの販売。
第 8 回	2013 年 2 月	ANA 航空教室・遊びの森など協賛企業のブースを開設。 余ったユリーの使い道として、エコ・バザーを開催。 Twitter の活用を開始。
第 9 回	2014 年 2 月	病院の仕事体験、ビューティーサロン、自衛隊のブースを開設。 事前予約制の導入。職業案内所の電子可。 中央大学松野ゼミによる密着取材。(ケーブル TV にて放送) 大雪のため初日の 13 時で中止。
第 10 回	2015 年 2 月	10 周年記念ストラップの作成。 よみうりランド・こどもの国・社会福祉法人緑成会・目安箱の設置・地域団体の着ぐるみ 7 体が参加。 ベトナムにて第 1 回ミニフエを開催。

## 2. ミニたまゆりの仕組み

ミニたまゆりのコンセプトは、「子どもたちが、仮想の町での労働体験を経て、労働の喜びや、お金の大切さ、社会の仕組みを楽しみながら学ぶ」ことにある。「ミニたまゆり」に参加する子どもたちは、受付で町の住民(市民)の証となる、市民カードを受け取り、町の仕組みについてレクチャーを受ける。町の仕事は、「公共」「制作」「食事」「遊び」「イベント」の 5 つのグループに分類されており、受付を済ませた子どもたちは、職業案内所にて、70 種類以上の仕事の中から、好きな仕事を

選ぶ。市民カードは、仕事名、労働時間、給与、税金などの記録用紙となっており、職業案内所にて、やりたい仕事を選び、市民カードの仕事名を記入してもらう。

手続きを終えると、子どもたちは指定の店舗に移動し労働を体験する(各店舗では本学の学生が子どもたちのサポートをする)。子どもたちは仕事が終わると銀行へ行き、「ミニたまゆり」の通貨「ユリー」を受け取る。どんなに仕事をして、一律、時給 8 ユリーである。銀行の横には、税務署があり、そこで、所得の半分を税金として納税する。残りの 4 ユリーは自分の好きなように使うことができる。



図 1 町の生活の流れ

### 3. 第10回ミニたまゆりの概要

2011年に開催された、第6回ミニたまゆりにおいて、本活動を報告書としてまとめる作業を行っており、発行当初は、担当教員の番匠がデザイン・執筆・編集を行っていたが、徐々に学生主体の編集作業が行われるようになり、現在では、原稿の執筆・編集作業を学生が中心となり行っている。本節では、最新のミニたまゆり報告書より、第10回ミニたまゆりの概要について紹介する。

表3 第10回 ミニたまゆりの概要

開催期間	平成27年2月7日(土)・8日(日)
開催時間	10:00～16:00
場 所	田園調布学園大学 3・4・5号館
対象年齢	5～15歳(小学校未就学児は付添いが必要)
参加費用	300円(二日間有効)
来場者数	有料来場児童786人 のべ来場者約2000人
来 賓	川崎市福田市長、神奈川県政策研究・大学連携センター 林所長、川崎市教育委員会 峪委員長、多田麻生区長がミニたまゆりの視察に来校。子ども市長との対談、町の見学を行った。

### 第10回 ミニたまゆり記念活動

10回目の開催を記念行事として、記念ストラップの作成と、着ぐるみイベントを開催した。着ぐるみイベントでは麻生区や田園調布学園大学にゆかりがある着ぐるみ7体(フロン太「川崎フロンターレ」・ランドッグ「よみうりランド」・かきまるくん「麻生区役所」・ピーガルくん「警察」・はまにゃん「自衛隊」・ざっくう「J:COM」・プリニー「遊びの森」)が参加し、開会式のテープカットや各イベントのPR活動を行った。



第10回子どもがっさるミニたまゆり

田園調布学園大学

<http://minitama.jp/>

写真1 企業協賛の着ぐるみ・10周年記念ストラップ



#### 4. 子ども会議

ミニたまゆりでは、2月の実現に向けて、10月～1月の期間、月に1回のペースで地域の子どもたちを大学に招いて「子ども会議」を開催している。子ども会議では、大学生が司会者となり、子どもたちと一緒に町のルールや新しい店舗について話し合いを行う。また、本番に向けた、販売する在庫の作成・接客の練習・カンバンや飾り付けの作成といった準備を行う。

子ども会議に参加すると、1日につき4ユリーの報酬が支払われる。これは、オープン直後は町にユリーが流通していないので消費者が不在となり、店を開いてもお客が集まらないという問題を解決するため、子ども会議参加者が積極的に消費者役を担うことによって、町の経済をスムーズに動かすことが目的となっている。

毎回の子ども会議の中には必ずワークショップの時間が設けられている。子どもたちに、議題を投げかけグループ毎に議論を行い、各グループが導きだした結論をグループの代表児童が発表する。子どもだけのグループでは活発な意見が得られないが、ファシリテーター役の学生がうまく誘導することによって、子ども独自の自由な発想が生まれる。

発表会の意見は、積極的に町の仕組みに取り入れ、次回の子ども会議で町の決定事項として大きく取り上げ、子どもたちに周知する。この経験を繰り返すことで、子ども会議に参加する児童は、自分たちの考えが町づくりに繋がる事を理解し、ミニたまゆりを自分たちの力で作り上げているという実感を得られる。

本節では、最新の報告書より、各回の子ども会議の担当学生による当日の状況および感想を紹介する。

##### ・第1回子ども会議 2014年10月18日(土)

内容：ミニたまゆりの説明・グループワーク・アイスブレイクゲーム・ミニたまゆりの説明の上映・プリント配布・ミニたまゆりのキャッチコピーを考えよう・子ども市長選挙の説明  
・ユリーデザインの説明

**当日の状況：**第一回目の子ども会議のアイスブレイクは、動物あてゲームを行いました。グループの仲間がヒントを出し合い、指定された動物を当てるゲームです。積極的に発言する子どもたちも多く、学生スタッフはそれをまとめる役割をこなしているようでした。後半では、町のキャッチフレーズをグループごとに話し合っていました。各グループに付箋と模造紙を配り、一人ひとりがたくさんのワードを出して、そのワードをみんなで話し合っつなげたりして合計7つのキャッチフレーズが出ました。その中から子どもたちに投票してもらい、今回のミニたまゆりのキャッチフレーズが決まりました。自分が考えた言葉が町のキャッチフレーズとして使われる誇らしさを噛み締めていました!

**子ども会議の感想：**子ども会議が始まる前、学生スタッフは大変緊張している様子でした。ただ、

第一回目は参加する子どもの人数が少なかったため、より親密に子どもたちと接することができたようでした。ミニたまゆりについての説明をする際、すでに参加したことがある子どもたちに感想を聞くと積極的に答えてくれる子どもたちもいました。その際、学生スタッフと相談し合う様子もうかがえました。子ども会議終了後は、学生スタッフと子どもたちが、「またね」と手を振りあって挨拶をし、すっかり仲良くなっている様子でした。

表4 各グループが考えた「ミニたまゆり」のキャッチフレーズ

グループ名	キャッチフレーズ
きつね	小学生、大学生の共同した年に一度の笑顔あふれる町
うま	みんな面白いエコな町
ねこ	みんなの希望がかがやく町
しか	おいでよ!虹のように明るく楽しいみんなの町
うさぎ	みんなで支え合い、仲良く夢を叶える町
いぬ	みんなで仲良く力を合わせる愉快な子どもの町
イルカ	未来羽ばたく協力の町

## ・第2回子ども会議 2014年11月22日(土)

内容：・アイスブレイクゲーム・市長選挙・キャッチフレーズ投票・町のルールをたくさん出そうゲーム・子ども市長の発表

**当日の状況：**第2回子ども会議のアイスブレイクは、「謎解き!だれかわかるかなチャレンジ!」と称する、キャラクター当てゲームを行いました。キャラクターの特徴が書かれている紙を子どもが読み、学生が模造紙に絵を描くゲームです。初の試みで不安もありましたが、楽しそうに活動している様子を見ることができ安心しました。子ども市長選挙では、11人の立候補者がミニたまゆりをどのような町にしたいかなど各自演説を行い、投票で7人の市長が選出されました。グループワークでは子ども達はゲーム感覚で様々な町のルールを考え、一番多くのルールを考えたグループには、お菓子の景品がプレゼントされました。

**子ども会議の感想：**司会を任されると思っていたので緊張しました。至らないところも沢山ありましたが、他の学生スタッフが協力してくれたおかげで問題なく進行することができました。子ども達もきちんと話を聞いてくれたので話しやすかったです。グループワークでは子ども達の柔軟な発想に驚かされることも多く、まとめる学生が大変そうでしたが盛り上がっていたのでよかったです。

**市長選挙：**市長選挙に立候補した子どもたちは、「立候補した動機」や「ミニたまゆりをどんな町にしたいか」など自分の意見を堂々と演説していました。選挙で選ばれた子ども市長は、皆やる気があり自分の意見をはっきり言える頼りがいのある子どもたちです。子ども会議終了後、会場に残って

もらい、今後の市長の仕事について説明を受けました。また、子ども市長の最初の仕事として、川崎市のコミュニティー放送局であるFM川崎の生放送番組に出演し、学生スタッフとともにミニたまゆりのPR活動に貢献してくれました。



写真2 市長選挙の演説の様子(左) 福田川崎市長との対談の様子(右)

### ・第3回子ども会議 2014年12月13日(土)

内容：・アイスブレイクゲーム・ユリーのデザイン投票・グループワーク(お店の準備をする) 看板作製, エコバック, シュシュ, しおり, ミサンガ, 魚釣り, 小物入れ, 紙ビーズ, 折り紙

当日の状況：第3回子ども会議のアイスブレイクでは、○×ゲームを行い子どもたちの緊張をほぐしつつ、ミニたまゆりについての基本的な知識を身に着ける、といったことをしました。子ども会議自体が3回目、既に場の空気に慣れている子どもも多かったということもあり、すぐに笑顔を見せてくれました。その後、ユリーのデザイン投票を、子ども市長の司会で行いました。子ども市長たちは、緊張しているにも関わらず、とても上手に司会を行ってくれました。最初、私のサポートが必要かと思っていましたが、そんな必要はありませんでした。子どもたちは、私たちが予想していたよりもずっと頼もしく、驚かされました。

その後は、看板と、ミニたまゆり当日に販売する小物を作製しました。どちらも時間が少し足りないかと私は心配していましたが、子どもたちはとても集中して作業を行っていたので、そのようなことはありませんでした。看板はどれも個性的で、素晴らしい出来に仕上がっていました。

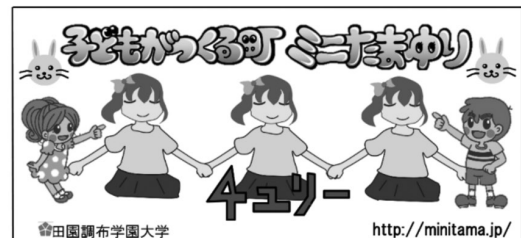


図2 子どもたちのアイデアからデザインされたユリー

・第4回子ども会議 2015年1月24日(土)

**内容:**ミニたまゆりのリハーサル(ミニ・ミニたまゆり)

リハーサル内容:シュシュ・販売店・駄菓子・しおり・射的・から揚げ・折り紙・ビューティーサロン・チョコバナナ・モグラたたき・輪投げ・清掃局・ミサंगा・1円玉落とし・フルーツポンチ・紙ビーズ・小物入れ・魚釣り・エコバッグ

**当日の状況:**第4回の子ども会議では本番さながらのリハーサル(ミニミニたまゆり)を行いました。1年の大学生は、ミニたまゆりを見たことがないので、良いリハーサルとなりました。受付を済ませた子ども達には事前に10ユリー渡しており前半後半と別れて前半組は仕事→遊び、後半組は遊び→仕事と役割を担当しました。

今年のミニたまゆりではNPO法人ソシアキュアアンドサポートの協力で、ネイルサロン・メイク・ハンドマッサージを行う「ビューティーサロン」という新しい店舗を開くことになっており、NPO法人のスタッフが駆けつけ、子どもたちにメイクやマッサージを指導してくれました。

## 5. ミニたまゆり本番後の各グループの報告

平成27年2月7日(土)・8日(日)に開催された第10回ミニたまゆりは、前年度が雪のため初日の午前中のみ開催という不本意な結果に終わったこともあり、上級生として学生グループを指導する立場の2年生学生が完全なミニたまゆりを体験しておらず、手探り状態で運営を行うといった不安材料があった。イベントが終了し、次章で紹介する保護者アンケートなど結果を見てみると、参加者からの大きな苦情もなく、スムーズに運営できたイベントとなったことがわかる。本節では、最新の報告書より、公共・制作・遊び・食事・イベントの各グループをまとめていた2年生リーダーによる各グループの報告内容を紹介する。

### ・公共グループの報告

公共グループは、職業案内所や市役所など、ミニたまゆりがひとつの町として成り立つための仕事をしています。町のシステムをしっかりとさせるためにも、私たち学生スタッフは連携の取り方を話し合いました。特に職業案内所は、毎年、多くの子どもたちであふれ混雑が予想されるため、机の配置や学生同士の連絡方法などを考え改善しました。

学生同士の連絡方法を改善することにより、他の仕事を担当していた子どもたちが職業案内所を訪れて、自分の担当の仕事についてPRするようになりました。仕事を積極的にこなそうとしているところが印象的でした。

表5 公共グループの仕事一覧

市民登録	登録料金(300円)を集め、市民カードを配る
職業案内	仕事を紹介し、市民カードに記入する
新聞社	取材した記事や写真を編集し新聞を発行する
アンケート	子ども達からアンケートを集める
銀行	労働時間に合わせて子どもに給与(ユリー)を支払う
税務署	給与の50%を税金として支払う
市役所	様々な市民の要望に応える(迷子・落とし物・質問など)
警察署	落とし物や迷子の対応 町の安全を守る
テレビ局	取材したビデオを編集し放映する
清掃局	町をきれいにする・ゴミの分別を促す
報道・Twitter	町の状況をTwitterで紹介する
声優体験	プロの声優の指導のもとアニメに音声吹き込む
アナウンサー体験	アナウンサーになってニュースや天気を伝える
福祉センター	バリアフリーマップ作成や異議申立書の作成など

### ・製作グループの報告

製作グループでは、はじめに子どもたちに仕事のし方(作り方)を教えた後に、各自自由にその店舗にある材料を使用し、職人としての仕事をしてもらいます。子どもたちは、私たちが思いもしないような材料の使い方をしたり、装飾などに工夫をします。そのため、私たち学生が驚くような商品が多数ありました。製作のエリアでは、概ね子どもたちが楽しんで働ける環境を提供することができたと考えています。しかし、仕事によって働く子どもたちがいる店舗、いない店舗があり、ばらつきが出てしまったので、今回はこの原因を探り、改善していきたいです。また、前回まで製作グループに所属していた物品担当を、一つの部署にしました。物品担当は、物品の運搬、買い出しなどを中心に行います。このように、物品を専属で行う部署を増やすことにより、それぞれの部署で手が届かない部分を補う役割を担う部署となり、非常に円滑に進める事ができました。

表6 製作グループの仕事一覧

シュシュ	毛糸を使い髪どめを作る
ミサンガ	紐を結んでミサンガを作る
小物入れ	牛乳パックに飾りつけをする
紙すき	材料が解けた水をすくってはがきを作る
紙粘土	紙粘土で好きな形を作り色を塗る
紙細工	筒状にした紙を重ね合わせ箱などを作る
ダンボール鉄砲	ダンボールで輪ゴム鉄砲を作る
かざぐるま	かざぐるまの製作
ちぎり絵	紙をちぎって紙に貼り、作品を作る
紙ビーズ	紙を巻いてビーズを作り、ネックレス・ブレスレットを作る
名刺	パソコンを使って名刺を作成する
しおり	単語帳に好きな絵を描き、穴に紐を通す



エコバック	紙を折ってバッグを作る
プラバン	プラバンに絵を描いてオープンで焼く
販売店	お店で作った在庫を集め、販売する

## ・遊びグループの報告

自分で稼いだユリーを使って魚釣り、射的、もぐらたたき、輪投げなどの遊びをして景品を獲得します。子どもたちみんなゲームを楽しんでいる様子が見受けられました。子どもの年齢によって遊びのハンデを加えることによって共通のルールの大切さ、思いやりを学んでもらえたかと思います。ミニたまゆりが終わりに近づくにつれ、遊びブースは子どもであふれていました。

改善点としては、1年生の子どもに対する言葉づかい、呼び込み方法の改善、遊びのレベルにあった景品の見直し、遊びの人気不人気についての対処法などが挙げられます。今回、子どもたちの列の割り込みが目立ったのでそちらの点もどのようにすればトラブルが減るのかも考えていきたいです。前回の反省であった、景品のお菓子の補充問題については、物品と連携をとり、遊びブースの近くに補充箱を設置し、手の空いた物品担当学生がお菓子を補充するという形を取ったことで改善されました。

表7 遊びグループの仕事一覧

ヨーヨー釣り	縁日でおなじみのゲーム
スーパーボールすくい	スーパーボールをボーイですくう
魚釣り	制限時間内に何匹の魚を釣り上げるかを競う
ボウリング	ペットボトルのピンをボールで倒す
チョコつまみ	マーブルチョコを箸でつかんで皿に移す
射的	手作りの割り箸鉄砲で輪ゴムを飛ばす
ストラックアウト	ボールを投げて的に当てる
輪投げ	ペットボトルの的に輪を投げ入れる
もぐらたたき	穴から出てくる人形をハンマーで叩く

## ・食事グループの報告

今年はお天気にも恵まれ、たくさんの方に足を運んでいただきました。インフルエンザなどの予防対策として、ご来場の方々に手の消毒をポスターなどで促したり、販売担当の学生、子供達にマスクや手袋を着用してもらうなどウイルス対策を徹底しました。また、たくさんの方に足を運んでいただいたため、食堂のイスやテーブルが足りなくなってしまったので使用していない教室を食事スペースとして開放するなど迅速に対応しました。それでも食事スペースが少ないという意見が聞かれたので、次回からは、テーブルや椅子の配置を工夫するなどして改善していきたいと思います。

表 8 食事グループの仕事一覧

フルーツポンチ	フルーツ缶にジュースなどを注ぎ販売
飲み物	ジュースを紙コップに注ぎ販売
ポップコーン	機械で作ったポップコーンを販売
フライドポテト	調理済みのポテトを容器に盛りつける
わらび餅	紙コップにわらび餅を入れ、蜜をかける
フランクフルト	ホットプレートで調理する
カレー	ご飯とカレーをお皿に盛りつける
焼きそば	調理済みの焼きそばをバックにつめる
綿菓子	専用の機械で綿菓子を作り販売
クレープ	市販の生地フルーツをトッピング
から揚げ	唐揚げを盛り付け販売
中華まん	中華まんの温め・販売
うどん	うどんを盛り付け販売
トン汁	豚汁を盛り付け販売
珈琲・焼き芋	コーヒーと焼き芋を喫茶店のように販売
パン屋	外部によるパンの現金販売
豆腐屋	外部による豆腐の販売

## ・イベントグループの報告

昨年のお雪の影響により今年のミニたまゆりは極めて経験者の少ない開催となりましたが、先生方、先輩方のご協力があり大成功に終わりました。また、イベントではコアスタッフを中心に「どうすれば子どもたちに楽しんでもらえるか」「どこまで体験してもらうか」を常に考えながら臨機応変に行動しました。特に今年はミニたまゆりが始まって 10 周年ということもあり、様々なイベントを取り入れました。

たくさんの方の着ぐるみで盛り上げたり、市議会では新たに福祉センターとの連携や目安箱の設置などを取り入れ、とても充実した会議となりました。模擬裁判でも 1 日目と 2 日目で裁判の内容を変えたりと、今まで以上にたくさんの方にチャレンジした本番になりました。

表 9 イベントグループの仕事一覧

じゃんけん大会	じゃんけんで勝ち残った子どもに菓子をプレゼント
○×クイズ	クイズのお題をスタッフが発表し○×に立って分かれてもらう
ビンゴ大会	ビンゴになった人に、豪華賞品のおやつをプレゼント
宝くじ	市役所で販売した宝くじの抽選会
ビューティーサロン	女の子にネイルアート・メイク・ハンドマッサージを行う
模擬裁判	子ども裁判員の意見を元に被告人の判決を決める。
市議会	目安箱で出た意見について論議を行う。
音楽演奏	簡単な打楽器を使って音楽演奏。プロの演奏家が指導します
病院体験	血圧測定・注射・エコー・心臓マッサージなど病院の仕事が体験できる
ガチャポン	外部によるガチャポンでの懸賞

自衛隊災害支援展示	自衛隊による災害時に関する情報や制服などの展示
自衛隊車両展示	自衛隊による車両の展示
消防車展示	消防署による消防車の展示
白バイ・パトカー展示	警察署による白バイ及びパトカーの展示
着ぐるみ	着ぐるみによるグリーティング

各グループリーダーの報告書から、「ミニたまゆり経験者が少ないことに対する不安」「インフルエンザ等の病気・ケガなどのトラブルなく運営できるか?という不安」「自分たちが考えた内容に、参加児童・保護者が満足してくれるのか?という不安」などが読み取れる。長年、ミニたまゆりに携わる学生と接してきた筆者としては、この「不安」感があるからこそ、それを払拭するための努力を行い、参加した児童・保護者に満足してもらうための創意工夫を繰り返し、イベント当日、参加する児童の笑顔に触れることにより、何物にも代えがたい成功体験を得るのだと考えている。また、報告書からは、結果に満足するだけでなく、反省点や改善点を指摘し、自分の経験を次世代につなげ、ミニたまゆりの活動をより充実したものにしたいという気持ちも伝わってくる。

## 6. ミニたまゆりにおける協賛企業・団体ブースについて

ミニたまゆりの魅力と意義の一つに、地域の企業・団体・行政が「ホンモノ」を持ってきてくれることがあげられよう。これは地域の子どもたちだけでなく、本学のスタッフ学生も「ホンモノ」のまちづくりをしている最前線の人の姿を目の当たりにすることが出来るという一石二鳥の効果をもたらしている。教科書やメディア空間だけで知っている、市長・役所・警察・消防・自衛隊をはじめ、様々な仕事の数々。百聞は一見に如かずとはまさにこのことであり、単なる概念的知識にとどまらず、そこで役割を果たしている「ひと」を今後の日々で具体的にイメージ出来るか否かの違いは大きいだろう。

また協賛して下さる企業にとっても、CSR (Corporate Social Responsibility) の一環として自他ともに評価する実績となりうるし、施設・医療・教育・行政組織にとっても、地域貢献や社会教育活動、広報などといった役割を果たす機会にもなりうる。文部科学省の「中学校職場体験ガイド」には受入事業所のメリットとして、「教育への参画を通しての社会貢献」「将来に向けた産業界を担う人材育成」「職場の活性化」「中学生や学校教育への理解」「地域、学校との交流の深化」「指導に当たる社員の意識の向上」「地域における事業所の認知度の向上」を挙げているが、「ミニたまゆり」に協賛して頂く組織にとってもこのようなメリットが想定されるのではないだろうか。翻って考えると、子ども達が企業・組織に出向くのではなく、企業・組織が大学という教育の場のフィールドに出向いてくるというユニークな取り組みが本学の「ミニたまゆり」であるとも言えよう。

1999年12月の中央教育審議会答申「初等教育と高等教育との接続の改善について」および2004年1月の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」において小学校段階から発達課題に応じて「キャリア教育」をすすめることが提言されており、その一環として職場体験等を促進することが重要であると指摘されているが、本学が大学としてその機会を地域の

小学生に対して提供しているということも評価出来る点の一つである。

参加組織は年々増加しているが、これは 10 年を迎える本事業が地域にしっかりと根付き始めた証左であろう。そしてこれからの 10 年、「ミニたまゆり」を経験した子どもたちが郷土愛を育み、今度は地元へ地域貢献をする立場へと成長してくれることを期待したい。

今後の課題としては、協賛団体の分野が偏ることなく、また企業・組織単体だけでなく、業界団体などが組織的に関わってもらえるような仕組みづくりも検討していくことが必要である。

表 10 第 10 回ミニたまゆりにおける協賛企業・団体一覧

団体名	内容
川崎市教育委員会	広報活動への協力
DCU地域パソコン倶楽部	受付作業ボランティア
川崎市橋りサイクルセンター	紙すき
神奈川県立麻生総合高等学校	声優・新聞社・テレビ局
麻生養護学校	物品販売
セレサ川崎農業協同組合	調理用野菜の提供
地域通貨たま運営委員会	地域通貨たまの提供
社会福祉法人ウィズ町田スワンベーカーリー町田店	パンの現金販売
新百合ヶ丘総合病院	病院の仕事体験
なでしこ同窓会	エコ・バザー
NPO法人ソシアキュアアンドサポート	ビューティーサロン
自衛隊 神奈川地方協力本部	被災地支援関連展示
麻生警察署	バトカー・白バイの展示
麻生消防署	消防車の展示
よみうりランド	ガラポン・着ぐるみの貸与
こどもの国	ダンボール鉄砲・風車

## V. アンケート集計

### 1. 保護者アンケート集計

ミニたまゆりの特徴の一つに、毎回、参加者から収集したアンケート内容を分析し、参加者の満足度を向上させるために、何を改善すべきかを学生とともに議論し、翌年の改善点として引き継ぐよう努めている。参加児童および児童の保護者に対してアンケート用紙を配布し、ミニたまゆりに関する改善点、感想などについて自由記述の質問をしている。今回、2011 年から 4 年分（2013 年度は大雪のため中止）の保護者向けの自由記述アンケートに書かれている意見を、表 11 に示した項目で分類し件数の集計を行った。特徴的な数値(太字)についての状況と改善案を次項に示す。

表 11 保護者からの苦情・改善案の集計結果

	2011 年		2012 年		2013 年		2015 年	
1.市民登録時の混雑についての苦情	9	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
2.余ったユリーの使い道についての苦情	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
3.消費者が少ない事への苦情	4	5.6%	3	7.9%	3	2.5%	3	7.3%
4.大人もユリーを使えないか?という提案	4	5.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5.大人ユリーの価格に対する苦情	0	0.0%	1	2.6%	3	2.5%	4	9.8%
6.会場・アナウンス・看板・名札が判りにくいという苦情	16	22.2%	8	21.1%	19	16.0%	10	24.4%
7.衛生面での苦情	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
8.学生スタッフの対応に対する苦情	3	4.2%	0	0.0%	10	8.4%	5	12.2%
9.運営方法についての苦情	6	8.3%	5	13.2%	12	10.1%	4	9.8%
10.参加児童の態度(危険行為・万引き)への苦情	3	4.2%	1	2.6%	2	1.7%	0	0.0%
11.保護者の態度(過干渉・席の占有)への苦情	1	1.4%	0	0.0%	2	1.7%	0	0.0%
12.職業案内所の混雑・仕事の少なさへの苦情	2	2.8%	2	5.3%	21	17.6%	4	9.8%
13.会場環境(狭い・寒いなど)への苦情	1	1.4%	6	15.8%	13	10.9%	2	4.9%
14.新店舗の提案	5	6.9%	4	10.5%	4	3.4%	1	2.4%
15.税金・物価に対しての苦情	2	2.8%	0	0.0%	11	9.2%	3	7.3%
16.税金の使われ方についての説明	0	0.0%	0	0.0%	4	3.4%	2	4.9%
17.乳児・4歳以下の付き添いについての提案	3	4.2%	3	7.9%	4	3.4%	0	0.0%
18.広報方法についての提案	2	2.8%	4	10.5%	3	2.5%	1	2.4%
19.その他の提案	9	12.5%	1	2.6%	8	6.7%	2	4.9%
合計	72	100%	38	100%	119	100%	41	100%

### 「1.市民登録時の混雑についての苦情」

2005～2011年度のミニたまゆりでは運営ノウハウが確立されていない事もあり、オープン直後に1時間以上並ぶことがあるなど、毎年多数の苦情が寄せられていた。2012年度から、外部ボランティアに受付作業を協力してもらうことになり、大幅に窓口を増やし、人の導線を工夫することによって大幅に苦情件数が削減した。

### 「4.大人もユリーを使えないか?という提案」

児童に付き添う保護者から「開始直後、お客さんがいないので、親が代わりにお客役になってあげたい」「子供が作った食事を食べてみたいのでユリーを売ってほしい」という意見が多く寄せられていた。しかし、2008ミニたまゆりにて、ユリーの現金販売を行ったところ、現金で購入したユリーを児童に使わせる保護者が急増し、本活動の趣旨に反するという事でユリーの現金販売を行っていなかった。2012ミニたまゆりより、デザインを変えて大人しか使えない、「大人ユリー」を現金販売することにより、この不満は解消され、2012ミニたまゆりでは、多くの感謝の声が寄せられた。しかし、2015ミニたまゆりでは、大人ユリーの価格が高い、金額に対する食事の量が少ないなどの新たな苦情が寄せられるようになった。



## 「6.会場・アナウンス・看板・名札が判りにくいという苦情」

この項目に関しては、配布された地図が判りにくい、参加者と学生との見分けがつかない、看板が見にくいなど、毎年多くの苦情・改善案が寄せられている。毎年、案内表示を増やすなどの対応をしているが不十分であることが読み取れる。本項目は、今後の最重要改善課題だといえる。

## 「12.職業案内の混雑・仕事の少なさへの苦情」

この項目は、「1.市民登録時の混雑」と同様、ミニたまゆりの開始直後から大きな課題となっていた。町を訪れる全児童が何回も利用し、各店舗と連携をとる必要もある非常に運営が難しい内容となっている。特に2013ミニたまゆりでは、予定していたより多くの来場者があり、用意した仕事カードが足りなくなり職安スタッフの対応も疎かになる状況となった。その対策として、2014ミニたまゆりから、ミニたまゆりの参加は登録制とし、事前に参加人数を把握できるようにするとともに、仕事カードという煩雑になっていたプロセスをなくし、職安の仕組みをシンプルにするといった改善を行った。

## 「13.会場環境への苦情」

ミニたまゆりでは、児童とともに多くの保護者が付き添いとして参加しており、保護者の多くが食堂で休憩している。毎年、通路が狭い、席が足りないなどの苦情が寄せられており、毎年改善を行っているが、2012年は、食堂の通路を広げるため客席が減少してしまい、居場所の無い児童・保護者で食堂が溢れかえってしまった。翌年から、5号館カフェテリアなど休憩スペースを増す、学生は休憩時食堂を利用しないなどの、対策を施し混雑の軽減を行っている。

## 「16.税金の使われ方についての説明」

毎年、税金を払うのは可哀そう、税金が高い、物価が高いなどの苦情が寄せられるが、ミニたまゆりのコンセプトとして、「働いて得られたお金の有難さを知る」「税金の仕組みを知る」といった目的があるため、値下げなどの対応を行う予定はない。また、近年増えている要望として、「税金の使い道について判りやすく解説してほしい」という要望が増えてきており、これに関しては、2016ミニたまゆりから積極的に対応するよう準備を進めている。

## ・ミニたまゆりに対する地域からの評価について

表12は、ミニたまゆりに参加した保護者に対してのアンケート結果から、肯定意見を項目ごとに分類して集計した結果である。毎年アンケートの内容を元に改善が行われていることが浸透しているようで、イベントへの要望がより具体的になるとともに、2012年のアンケートでは、改善に対しての感謝の意見が多く集められた。アンケートにかかれるコメントも、年々文字数が増えてきており、以前は「楽しかった」「子どもが喜んでいた」などの簡素なコメントが多かったが、近年では、より具

体的で心のこもった記述が増えている。中には、「子どもが、将来はこの大学で学びたいと言っている」と言った意見もあり、運営者の励みとなるコメントが数多く寄せられるようになった。

長年の改良の末、大きな不満は解消されたが、税金が高い、店舗のクオリティーが低いなど、他のテーマパークと比較するような意見が増えてきている。ミニたまゆりは、児童への教育活動の一環として行っており、参加者の娯楽が第一目的ではない。今後、ミニたまゆりのコンセプトを判りやすく伝える努力が必要だと感じている。

表 12 保護者からの評価項目の集計結果

	2012 年		2013 年		2015 年	
回を重ねるに従い改善される事への評価	7	11.3%	1	1.0%	3	10.0%
お金の有難さが学べる	1	1.6%	18	17.1%	3	10.0%
労働の喜びを学べる	6	9.7%	18	17.1%	4	13.3%
社会の仕組みを学べる	3	4.8%	13	12.4%	5	16.7%
税金の仕組みを学べる	0	0.0%	16	15.2%	4	13.3%
学生の対応がよかった	7	11.3%	3	2.9%	2	6.7%
今後も継続してほしい	2	3.2%	2	1.9%	2	6.7%
色んな方と交流できる	3	4.8%	2	1.9%	0	0.0%
楽しい時間を過ごせた	12	19.4%	18	17.1%	3	10.0%
大学の雰囲気を知ることができた	2	3.2%	0	0.0%	0	0.0%
企画の内容に感心した	4	6.5%	10	9.5%	0	0.0%
大学の地域貢献について知れた	9	14.5%	0	0.0%	1	3.3%
その他	6	9.7%	4	3.8%	3	10.0%
合計	62	100%	105	100%	30	100%

## 2. 子ども会議のアンケート集計

全 4 回の子ども会議では、各回において、学生スタッフの意見を取り入れて作成した質問紙をもとに、アンケート調査を行ってきた。その目的は、子ども会議参加学生の感想や学びの状況を確認するとともに、ミニたまゆり及び子ども会議の運営に関する反省点や意見を求めるためである。

質問紙は、5 段階評価による選択式質問項目と、いくつかの自由記述で構成されている。回ごとに質問紙を作成したため、質問項目や質問文のばらつきがあり、また、質問の意図が不明確なものも含まれていたが、以下、子ども会議の参加の積極性や効果に関連する選択式質問項目の集計結果を報告する。

表 13 子ども会議でのコミュニケーションの積極性等

	各回の質問文	1.あてはまる	2.ややあてはまる	3.どちらともいえない	4.あまりあてはまらない	5.あてはまらない	回答者数	平均値
第1回 ロア斯塔ッフ	子どもたちと積極的にコミュニケーションをとることができた	14 41.2%	12 35.3%	5 14.7%	3 8.8%	0 0.0%	34	1.91
第2回	子どもたちと積極的にコミュニケーションを取ることができた	26 35.6%	29 39.7%	14 19.2%	3 4.1%	1 1.4%	73	1.96
第3回	ミニたまゆりを通じてコミュニケーションを取ることが楽しいと感じた	23 33.8%	32 47.1%	10 14.7%	3 4.4%	0 0.0%	68	1.90
第4回	子どもや学生、教職員とコミュニケーションを積極的に取ることができた	24 31.2%	33 42.9%	17 22.1%	3 3.9%	0 0.0%	77	1.99

表 14 ミニたまゆり(子ども会議)を通じて自分自身に自信を持つことができた

	各回の質問文	1.あてはまる	2.ややあてはまる	3.どちらともいえない	4.あまりあてはまらない	5.あてはまらない	回答者数	平均値
第1回 ロア斯塔ッフ	ミニたまゆりを通じて自分自身に自信を持つことができた	6 17.6%	8 23.5%	16 47.1%	3 8.8%	1 2.9%	34	2.56
第2回	ミニたまゆりを通じて自分自身に自信を持つことができた	11 15.1%	28 38.4%	24 32.9%	7 9.6%	3 4.1%	73	2.49
第3回	ミニたまゆりを通じて自分自身に自信がついた	8 11.8%	26 38.2%	22 32.4%	5 7.4%	7 10.3%	68	2.66
第4回	子ども会議を通じて、自分自身に自信をつけることができた	14 18.2%	33 42.9%	24 31.2%	6 7.8%	0 0.0%	77	2.29

表 15 ミニたまゆり(子ども会議)を通じて福祉のマインドを身に付けることができた

	各回の質問文	1.あてはまる	2.ややあてはまる	3.どちらともいえない	4.あまりあてはまらない	5.あてはまらない	回答者数	平均値
第1回 (一般学生)	ミニたまゆりを通じて福祉のマインドを身につくと思う	14 38.9%	14 38.9%	8 22.2%	0 0.0%	0 0.0%	36	1.83
第1回 ロア斯塔ッフ	ミニたまゆりを通じて福祉のマインドを身に付けることができた	1 2.9%	12 35.3%	17 50.0%	4 11.8%	0 0.0%	34	2.71
第2回	ミニたまゆりを通じて福祉のマインドを身に付けることができた	9 12.3%	26 35.6%	28 38.4%	6 8.2%	4 5.5%	73	2.59
第3回	ミニたまゆりを通じて福祉のマインドを身に付けることができた	6 8.8%	35 51.5%	22 32.4%	4 5.9%	1 1.5%	68	2.40
第4回	子ども会議を通じて、福祉マインドを身に付けることができた	16 20.8%	41 53.2%	17 22.1%	2 2.6%	1 1.3%	77	2.10

表 16 来年もミニたまゆり(子ども会議)のスタッフとして関わっていききたい

	各回の質問文	1.あてはまる	2.ややあてはまる	3.どちらともいえない	4.あまりあてはまらない	5.あてはまらない	回答者数	平均値
第1回 (一般学生)	来年もミニたまゆりのスタッフとして関わっていききたい	7 19.4%	10 27.8%	16 44.4%	2 5.6%	1 2.8%	36	2.44
第1回 ロア斯塔ッフ	来年もミニたまゆりのスタッフとして関わっていききたい	14 41.2%	11 32.4%	9 26.5%	0 0.0%	0 0.0%	34	1.85
第2回	来年もミニたまゆりのスタッフとして関わっていききたい	12 16.4%	23 31.5%	35 47.9%	2 2.7%	1 1.4%	73	2.41
第3回	来年もミニたまゆりのスタッフとして関わっていききたい	15 22.1%	21 30.9%	26 38.2%	3 4.4%	3 4.4%	68	2.38
第4回	来年度も子ども会議に関わっていききたい	15 19.5%	26 33.8%	28 36.4%	8 10.4%	0 0.0%	77	2.38

回ごとの質問文が微妙に異なっているため、厳密な分析には適さないが、全体的な傾向としては、参加の積極性や効果が高い評価となっていることが分かる。各回の自由記述においても好意的な意見がほぼ全体を占めていた。「楽しさ」や「やりがい」を感じたという意見、子どもとの関わり方についての学びや、自己の課題・反省点の気づきなど、前向きな意見が目立った。また、子ども会議の運営上の不手際や問題点についても、単に不満を述べるのではなく、建設的に改善点を提案する内容になっていた。

### 3. ミニたまゆり当日の学生に対するアンケート集計

2015年2月7日、2月8日の両日とも参加した学生全員にアンケートを配付・回収している。その目的は、参加学生の感想や学習効果、次回に向けた課題を見つけ出すためである。

質問紙は、感想や学習効果についての複数選択可の選択式質問項目と自由記述にて構成されている。両日で質問項目の一部が異なっているため、すべてを比較することはできない。また、2月8日は設問に対して未回答が多いため、全体としての傾向を見るまでにとどめておきたい。

表 17 参加学生数と担当した役割の内訳

単位：人(%)

区 分	2月7日	2月8日
公 共	49 (24.1%)	48 (23.6%)
制 作	38 (18.7%)	40 (19.7%)
遊 び	32 (15.8%)	31 (15.3%)
食 事・デ ザ ー ト	45 (22.2%)	46 (22.7%)
イ ベ ン ト	37 (18.2%)	36 (17.7%)
そ の 他	2 ( 1.0%)	0 ( 0.0%)
参 加 人 数 合 計	203	201

学生の担当する役割は、子どもたちの安全と町の運営がスムーズにできているか等の見守りが中心のため、各区分とも偏りが出過ぎないように、全体が見渡せるような配置になっている。

質問：ミニたまゆりについて、よかった点を教えてください(複数回答可)

表 18 よかった点についての回答

単位：人(%)

選択肢(複数回答可)	2月7日	2月8日
1. 子どもたちに接することができた	176(86.7%)	118(58.1%)
2. 企画者運営の実践を学べた	46(22.7%)	41(20.2%)
3. 充実感を味わえた	70(34.5%)	57(28.1%)
4. やり遂げたことで自信がついた	33(16.3%)	33(16.3%)
5. 他の学科・専攻の人と仲良くなれた	107(52.7%)	73(36.0%)
6. 教職員との交流が深まった	17(8.4%)	13(6.4%)

7. 地域の人たちと交流できた	37(18.2%)	7(3.4%)
8. その他	5(2.5%)	4(2.0%)
*未回答者数	0	66

よかった点については、両日とも「1.子どもたちに接することができた」と回答した学生が最も多く、次いで「5.他の学科・専攻の人と仲良くなれた」、「3.充実感を味わえた」となっている。普段接することの少ない小学生を中心とした子どもたちとの触れ合いを有意義と感じ、イベントとしての楽しさを味わいながら充実感を得られる経験であることがわかる。

質問：ミニたまゆりについて、難しかった点を教えてください(複数回答可)

表 14 難しかった点についての回答

単位：人(%)

選択肢(複数回答可)	2月7日	2月8日
1.子どもたちとの接し方が難しかった	46(22.7%)	29(14.3%)
2.何をしたらよいのかわからないことがあった	78(38.4%)	39(19.2%)
3.進め方や段取りを決めるのが難しかった	94(46.3%)	68(33.5%)
4.仲間との共同作業が難しかった	14(6.9%)	16(7.9%)
5.勉強やアルバイトとの両立が難しかった**	—	19(9.4%)
6.その他	34(16.7%)	6(3.0%)
*未回答者数	13	85

\*\*2月8日のみの質問項目

難しかった点については、最も多かったのが「3.進め方や段取りを決めるのが難しかった」であり、次いで「2.何をしたらよいのかわからないことがあった」、「1.子どもたちとの接し方が難しかった」となっている。進め方や段取りについては事前の説明や店舗のマニュアル等である程度は把握しているはずだが、コアスタッフ以外の学生はミニたまゆりに対する取組姿勢や準備が十分ではないため、指示がないと動きにくいという意見もあった。

質問：来年のミニたまゆりに参加したいですか

表 15 来年のミニたまゆり参加希望についての回答

単位：人(%)

選択肢	2月7日	2月8日
A.スタッフとして積極的に参加したい	24(11.8%)	17(8.4%)
B.参加したい	48(23.6%)	32(15.8%)
C.参加したくない	14(6.9%)	8(3.9%)
D.分からない	116(57.1%)	75(36.9%)
E.未回答	1(0.5%)	69(34.0%)



来年の参加については、「D.分からない」との回答が最も多いが、「C.参加したくない」との回答が極少数であることから、ミニたまゆりに参加するためには不安要素を取り除くことが必要ではないかと考えられる。そのため「参加区分」と「参加希望」についてクロス集計したものを表 16 に、「参加希望」と「難しかった点」の結果でクロス集計したものを表 17 に示し、考えてみたい。ここで、2 月 8 日は未回答が多いため、2 月 7 日の回答をもとに表を作成している。

表 16 参加区分と来年の参加希望人数についての関連性(2月7日)

	A.スタッフとして参加したい		B.参加したい		C.参加したくない		D.分からない	
公共	4	8.2%	9	18.4%	1	2.0%	35	71.4%
制作	3	7.9%	8	21.1%	3	7.9%	24	63.2%
遊び	5	15.6%	9	28.1%	2	6.3%	16	50.0%
食事・デザート	7	15.9%	11	25.0%	6	13.6%	20	45.5%
イベント	5	13.5%	11	29.7%	2	5.4%	19	51.4%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%

この表から、参加区分ごとの参加希望については「4.分からない」との回答が圧倒的に多く、傾向として区分ごとには大きな違いがないことがわかる。

表 17 参加希望と難しかった点についての関連性(2月7日)

	1. 子どもたちとの接し方		2. 何をしたらよいのか		3. 進め方や段取りを決める		4. 仲間との共同作業		5. その他	
A.スタッフとして参加	5	2.5%	9	4.4%	10	4.9%	3	1.5%	6	3.0%
B.参加したい	12	5.9%	19	9.4%	26	12.8%	2	1.0%	4	2.0%
C.参加したくない	1	0.5%	3	1.5%	6	3.0%	1	0.5%	2	1.0%
D.分からない	28	13.8%	46	22.7%	52	25.6%	8	3.9%	22	10.8%

参加希望で「D.分からない」と回答した中で、特に「2.何をしたらよいかわからないことがあった」、「3.進め方や段取りを決めるのが難しかった」が多いことがわかる。

これらのことから、役割やスケジュールの確認が不十分であることが考えられる。今後のミニたまゆりの運営を考えた場合、さらに学生たちの目的意識を高め、コアスタッフからの指示を待って行動するという関わり方でなく、担当する仕事かどのようなものか事前に十分理解させる取組みが必要であり、その点が次年度の課題となる。

## Ⅵ. 考察

酒井教授のゼミ活動の延長として始まった、ミニたまゆりは10年の試行錯誤の末、本学の地域貢献活動の中で最大規模の活動に成長し、地域からも大いに評価される地域に根付いた活動に成長し、「児童が楽しみながら社会の仕組みを学ぶ事ができるイベント」という目標を十分に達成できていると評価している。

表12の保護者からの評価項目の集計結果から、2014年度に対して特筆すべき数値的傾向は見受けられなかったが、コメントの内容・長さに着目すると、以前のアンケートに比べ、ミニたまゆりのイベントのすばらしさ、保護者からの感謝の気持ちが伝わる、気持ちのこもったアンケートが多数寄せられるようになっている。また、表11の保護者からの苦情・改善案の集計結果では、2013年まで、「受付での待ち時間」「仕事の少なさ」「会場環境の悪さ」など快適なイベントを阻害する項目に対する苦情が多かったが、2015年の集計結果では、これらの苦情の割合は低下している。2015年は、「会場が判りにくい」という苦情の割合が多かったが、新校舎建設中の動線の悪さに起因していると考えられ新校舎完成とともに割合が低下すると予測される。また、2015年のアンケート結果では、「商品の物価・税率」や「税金の使い道」についての意見が以前に比べ増えてきている。ミニたまゆりの目的の一つである、「児童に社会の仕組みを学ばせる」という観点からは、これらの項目に対する意見が増えることは喜ばしいことであり、イベントの快適さが向上したおかげで、これらの項目に目を向ける余裕ができたのだと考えられる。2015年のアンケート結果で唯一残念な点は、「学生スタッフの対応」についての苦情の割合が高いことである。ミニたまゆりでは、イベント当日のみ参加するボランティア学生も多く、彼らに活動の趣旨や目的、具体的な作業内容を十分に伝えられていないと反省するとともに、2015年度では、イベント前日にリハーサル日を設け、参加学生全員の意識を向上させるよう工夫を行っていく予定である。

以上のことから、「児童が楽しみながら社会の仕組みを学ぶ事ができるイベント」という目標は達成され、ミニたまゆりは、次の10年に向け新たなステージに立ったと考えている。

次のステージでは、「ミニたまゆりに関わった、大学生がキャリア教育・福祉マインドの観点からどのような教育効果があるのか調査し、より教育効果の高い活動にする」ことを目標として、本活動を継続していきたいと考えている。

表13～18に示したような、従来の学生に対するアンケート調査では、学生の積極性・やりがい・満足度などを調査する質問項目が主体となっており、教育効果を測定するための質問項目にはなっていなかった。これは、イベント開始当初、イベントを大学や地域に根付かせ継続的に開催し続ける事に主眼を置いてしまっていたことによる弊害だと考えられる。

そこで、2015年5月に、学生の教育効果を調査・分析するために、複数の教職員で構成されるミニたまゆりワーキンググループ(以下 ワーキンググループ)を発足し、定期的にミニたまゆりについて議論を行う場を設け、ミニたまゆりの教育効果の検証方法など定期的に議論することとなっ

た。ワーキンググループでは今まで曖昧とされていた本学におけるミニたまゆりの位置づけを明確化し、ミニたまゆりの基本方針を定めることとなった。策定したミニたまゆりの基本方針は次のとおりである。

## 子どもがつくる町「ミニたまゆり」基本方針

子どもがつくる町「ミニたまゆり」は、平成 17 年度より開始し、学生へ本学の建学の精神である「捨我精進」に基づく福祉マインドの概念の理解促進を図るための導入ボランティア活動として、「優しさや思いやりの心」、「柔軟な思考と行動力」といった、福祉を学ぶ者として重要な資質を入学後の早い段階で身につけさせるために実施されている。より実践的な内容で学生教育・地域貢献活動が推進するために以下のような基本方針を定める。

- 1) ミニたまゆりを通じて、地域社会に貢献できる人材の育成を行う。
- 2) ミニたまゆりを多角的な視点から捉え、研究を行い、その研究成果を積極的に地域社会へ還元する。
- 3) ミニたまゆりの教育機能を建学の精神の実践教育活動と位置づけ、学生に教育するとともに、その機能を地域に広く開放する。
- 4) ミニたまゆりを通じて産学官連携を進め、地域福祉の推進を図る。

ワーキンググループでは、上記の基本方針を元に、ミニたまゆりに関わる学生の教育目標、具体的な教育方法や、その効果測定方法などを議論し次の 10 年につなぐ新しいミニたまゆりの運営方法を提案し、この活動を通じ本学および地域への発展に貢献していきたいと考えている。

## 引用(参考)文献

- 文部科学省, 2010, 『学校基本調査報告書』文部科学省([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm), 2011.11.24).
- 中央教育審議会, 2005, 『我が国の高等教育の将来像』([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm), 2011.11.24).
- 田園調布学園大学, 2015, 『田園調布学園大学公式ホームページ』(<http://www.dcu.ac.jp/>).
- 大西, 宏治, 2010-03, 『子どもたちの創るまち：ミニ・ミュンヘン』, 地域生活学研究, 1: 97-108
- 稲葉克弘, 2009-05, 『「とさつ子タウン」実施プログラム作成』, 日本建築学会四国支部研究報告集
- 花輪由樹, 2010-09, 『「こどものまち」における地域学習の現状』, 日本建築学会大会学術講演概要集
- 花輪由樹, 2011, 『「ミニ・ミュンヘン」の原点への一考察』, 日本建築学会近畿支部研究発表会
- 田村光子, 2010, 『千葉における「子供大学」の実践展開の検討』, 植草学園短期大学研究紀要 11 号
- ミニたまゆり実行委員会, 『第 10 回子どもがつくる町 ミニたまゆり 2015 報告書』, 2015
- 酒井一郎・番匠一雅, 2008, 『こどものまちで働こう 地域で遊んで学ぶ, キャリア教育』国土社.
- 田園調布学園大学, 2013, 『平成 25 年度大学機関別認証評価自己点検評価書』(<http://www.dcu.ac.jp/wp-content/uploads/2011/06/h24jikotenken.pdf>)
- 市川享子, 2015, 『東日本大震災復興支援の実践から生まれた学生の学び』, ボランティア学研究 15, 143-153
- 小池源吾・天野かおり, 2011, 『「大学の社会貢献をめぐる省察－パワー・インバランスの視点から－」, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 60, 1-8